

静かな空間・大地



梅田 安治 (うめだ やすはる)

北海道大学名誉教授、(有)農村空間研究所 所長
(一社)北海道土地改良設計技術協会 顧問
北海道土地改良事業団体連合会 顧問

1932年札幌生まれ。北海道大学農学部卒。農学博士。同大教授を経て現職、地盤工学会功労賞、農業土木学会学術賞、日本農学会賞、読売農学賞、国際水田水環境工学会国際賞などを受賞。著書は、『エッセイ：泥炭地』『地域・環境・景観：北海道の農地・農村で』『土地改良に魅せられて四十余年そして十年』『土地改良の周辺』（6篇）など多数。

地理的空間と歴史的時間

「夜明け前」（島崎藤村）と「流離譚」（安岡章太郎）を江藤淳「地理のない歴史」は比較している。この二つの作品は木曾と土佐の違いはあるが、作者の血縁に連なる旧家の人々の幕末から明治維新にわたる時代を、それぞれ著者がほぼ同じ年齢の時に描いた小説である。

江藤は、前者は「いわば地勢図を描くことがそのまま地誌を叙することになる」というような、地理的空間の認識と、その空間に堆積していく歴史的時間の把握とが、文字通り渾然一体となった叙述である」としているのに対し、後者は「歴史の舞台となるべき特定の地理的空間が、劃然と目の前に提示されたという安心感を持つことができない」としている。

さらに、それは前者は「木曾路の風景」から入ったのに対して、後者は地勢図よりも「土佐言葉」からはじまったことによるのではないか、そしてそれが安岡文学における文体の本質かもしれない、とすると安岡は常に自他の間の距離を解消し、零距离な「無限に抽象化するという危険を内包することになる」からとし

ている。そして「流離譚」における地理的空間の不在を指摘している。それは「二人の作家のあいだの個性のちがいに相違ない」。しかしそれだけではなく、前者が1930年代、後者が1970年代後半という「時代の相違という要因は介在していないだろうか？」としている。この二者の間に介在する「言葉」「ふるさと」を変質させる出来事として、「大東亜戦争」を「太平洋戦争」と呼ばされた状況があったという江藤（政治）論が、ここでも展開されている。最終文節では「いずれにしても、地理的空間の存在しないところに、歴史的時間は堆積しない。」とある。ここで歴史的時間の流れがあってこそ地理的空間が確認できるのである。歴史的時間が堆積し、進行していくときに見える断面こそが地理的空間の景観なのである。

島崎藤村は「夜明け前」執筆前の1928年、地元の神坂小学校での「言葉について」という講演で「血につながるふるさと／心につながるふるさと／言葉につながるふるさと」「私はいま、言葉につながるふるさと、ということを考えております」と言っていたという。地元・ふるさとが彼の血・心を激しく静かに揺り起こ

し、ふるさとを確認し、表明すべく言葉につながりということなのだろうか。ここで「ふるさと」の認識を誘起させたのが地元・ふるさとの風景、そして景観だったのではないか。とすると「血／心／言葉」の前に「ふるさととしての風景、そして景観」の1行が見え隠れするのである。

地理的空間があってこそ歴史的時間の堆積ができ、その断面の景観が視覚・触覚などの五感を刺激する。「ふるさと」とは歴史的時間の堆積した地理的空間のみが形成しうるものなのである。それを先ずは各人で各様それぞれに認識させ、やがて各人の共通項として形成されるのが景観なのである。共通項はあるものの、景観そのものは、各人各様なのである。そして現代社会にあっては、現実的に地理的空間の形状は歴史的時間を待つまでもなく、経済活動の影響を大きく受けて変貌していく。そのとき地理的空間の基準点（値）を自然の中に求めるのである。「国敗れて山河あり」ということであろう。

いま東山魁夷は、「せまい所に人間が多く、資源も少ない国なので、工業によって栄えなければならない宿命を負っていますから、たしかに、せつかくの美しい自然もずいぶん荒れてきましたね。特に戦後は、ますます荒れる一方です。「国敗れて山河あり」と言いますが、日本は国が復興してから山河は敗れたようで「国栄えて山河敗れ」です。自然環境が荒廃するということは、人間生活も荒廃するということです。その意味で、日本の風景は決して良い状態で保たれているとは言えませんね。元来、日本はいろんな意味で風景の美しい国なのです。この風景美を、自然美を大切にしたいですね」と言っている。

日本は国土は狭いが南北に長く、緯度にすると20度くらいあってアメリカに相当する。海岸線も長く、高い山があり、複雑な海岸も美しく在る。他国にかなわないのは平原の広さだけだけれども、その平原の風景・景観を作っているのが農業であり、農地なのである。糸井重里をして「手自然」と呼ばしめた農民の営為の

成果なのである。しかし、その景観までもが「農業栄えて農村減ぶ」の状況となりかねない。

静かな大地

池澤夏樹の長篇に明治初期に北海道日高の静内に入植した池澤家先代の家庭内伝記ともいべき『静かな大地』がある。アイヌとの交流の緊張感や友情のあたたかさなども伝わってくる。著者自身によると、この作品の題名は松浦武四郎の評伝とでもいべき花崎皋平『静かな大地』から借用したものである。（静かな大地）とはアイヌ語（アイヌモシリ）の翻訳であるという。（アイヌモシリ）を語源的に分解すると「人の住む静かな穏やかな土地」となり、花崎皋平が「静かな大地」と訳しているそうである。「アイヌ」とは人間、「モ(mo)」は静か、「シリ(sir)」は大地で、それもラテン語のterra（地勢）ではなくtopos（地誌）の方であるとのことである。

アイヌの人達は自分達の住む所は斯くの如くありたいと願い行動していたのであろう。一世紀以上を経過した昨今、静かなことはあまり求められていないようだ。静かなことは停滞していること、停滞していることは貧しいことと連想されているようである。静かではなく騒々しければ活動的で豊ということか。近年の各種民営化論・都市再生など、やたらに騒々しいが、何かしら公共に対する安心・安全感が薄れ、社会のシステム・都市などが経済の対象としか見られていない感じがする。ときには農村再生、自然再生までもが、である。私達は生活・暮らしやすさを、近隣は当然、遠隔の人々とも共有することを求めている。そのための経済、そのための地域は、特に大きいことも高いことも必要ない。

かつて「アイヌモシリ」と呼ばれ、求められていたのは、落ち着いた中に静かに時の流れる空間なのではないだろうか。農村空間とは、地域で地域の人々で地域資源を見だし、「新アイヌモシリ」とでも呼ぶべき空間の連鎖する静かな大地でありたい。北海道の表現をするならば、果てしない大空と広い大地のその中で（松山千春）なのである。